

令和3年度学校評価表

青翔開智中学校・高等学校

建学の精神からなる本校の中長期目標	今年度の重点目標
<p>「探究」複雑な課題を高い創造力によって解決する取り組みを「探究」と定義し「探究できる人材」の育成を推進する。さらに文科省SSH校(指定期間H30～R04)として探究カリキュラムの開発を進めるとともに本校の探究活動を県内外へ発信・普及させる。</p> <p>「共成」共に成長する力を育成する教育をグローバル・ダイバーシティ教育と位置づける。グローバル・ダイバーシティ教育では多様性の理解を進め、英語を道具として場所や相手を選ばずに成長できる人材の育成を進める。</p> <p>「飛躍」自分とは何かを問い続け、好きなこと・得意なこと・社会が求めること・価値観を追求することにより、進路をデザインし実現する。</p> <p>さらに、探究活動を下支えするICT及び図書環境を充実させ探究を後押しするとともに、生徒と教職員が主役となり、保護者からの協力が絶えない学校創りを目指す。</p>	<ol style="list-style-type: none"> SSH中間審査でも指摘されたフィードバックの改善をICT環境を活用し進める。 道徳・福祉・人権をベースとする体系化したモデルを開発するとともに、中学道徳の新カリキュラムの実施と「青翔開智」の理念を学校全体で共有する取組みを進める。 体系化した6年間の進路支援の着実な実行と自己調整学習の開発。保護者を巻き込んだ進路支援のあり方の検討。 地元小学生への青翔開智の認知拡大と鳥取県内・全国へSSH事業の認知拡大。 学校や生徒会のビジョン・運営方針をクラスへ確実に伝達する。 高等学校新学習指導要領に基づく新カリキュラムの開発。

評価項目	具体的目標	年度当初		評価結果(年度末)		
		具体的方策	評価基準	評価	自己評価および次年度の主な課題	
重点目標1に対応	「探究」 探究学習・SSH	1. 探究スキルラーニングを通じた体系的な生徒の資質育成を推進する。	1. 司書教諭が中心となり探究スキルラーニングの実施を支援する。具体的には①各教科における取り組みの推進・支援、②クラウドでの事例共有と学校全体での取り組み内容分析・教員へのフィードバック、③フィードバックシート作成支援ツールの開発、の3点に取り組む。	1. 探究スキルラーニングの実施を推進できたか。 A: ①が80%以上の実施率、かつ②③を達成した。 B: ①が80%以上の実施率、かつ②③のいずれか一方を達成した。 C: ②③の達成に関わらず①が80%の未満の実施率だった。	1:A 2:A 3:B	1. 司書・司書教諭を中心とした探究スキルラーニング実施推進の体制が構築され、計画・実施・評価までの取り組みが学校全体の取り組みとして位置付けられ確実に実施された。フィードバックツールの活用推進で運用負荷の軽減をすることが次年度の課題となる。
		2. SSH事業(探究を中心とした教育プログラム)の内外への積極的な発信のための材料(コンテンツ)を整理・作成する。	2. 学校ホームページ・SNS等を活用した成果発信のための材料を整理・作成する。発信する具体的な材料として①SSH事業で開発・使用した教材、②生徒の活動・受賞等の実績集約、③生徒の日々の取り組みの様子の記録、の3点について整理・作成する。	2. SSH事業発信のための材料準備をできたか。 A: ①の発信に向けた資料等の整理が完了した、かつ②③を達成した。 B: ①の発信に向けた資料等の整理が完了した。かつ②③のいずれか一方を達成した。 C: ②③の達成に関わらず①の資料等の整理が完了していない。		2. SSH事業の取り組み内容や成果を外部へ発信するための材料を整理し、フォーマット作成する等準備を整えることができた。また、外部発信に先立って、学内(教員向けサイト、校舎内壁面)で情報を展開することができた。次年度は外部発信に合わせて、閲覧の状況を踏まえた上で外部からアクセスする機会をどのように設定するかの方策について検討する必要がある。
		3. 新指導要領下での人材育成としてプログラミング教育を軸とした新たな教育課程を開発する。	3. 既存のプログラミング教育(プログラミングキャンプ)の内容修正と実施をする。また、これまで実施してきたプログラミング教育のノウハウをもとに、中学校1年生～高校1年生の4か年(予定)を通じた体系的なプログラミング教育の教育課程案を開発する。	3. プログラミング教育課程案を開発できたか。 A: 体系立てられた4か年の教育課程案を開発することができた。 B: 4か年の教育課程案は作成したが、学年間の関連性を説明できない(体系立てが不足している)。 C: 4か年の教育課程案が完成しなかった。		3. 令和4年度から高1のみで実施するSTEAMの具体的な年間カリキュラムが設定され、授業の準備ができた。合わせて4か年に拡張した際のカリキュラム案を作成した。しかし、4か年カリキュラムについては具体性や学年間の関連性が若干乏しい部分もあり、令和4年度の実施状況を踏まえた4か年カリキュラムの具体的な修正(学年間の関連性に関する説明の追加等)が課題である。

重点 目 標 2 に 対 応	「共成」 生徒支援 グローバ ル・ダイ バーシティ 教育	<p>1. 自分自身を大切にし、その心を他者にも向けることができる。</p> <p>2. 生徒のアセスメントの精度を上げ、学校生活に安心感を感じさせる。</p> <p>3. 様々な違いのある他者を受容し尊重することで安心できる学校生活づくりに貢献しようとする事ができる。</p> <p>4. 青翔開智生としてあるべき自己の姿を問い続けることができる。</p>	<p>1. 中学は道徳にてレジリエンス教育を実施し、内面的なしなやかさを涵養する。高校は人権LHR・各科目内でおこなう道徳教育にて自己と他者を大切にすることを学ぶ。</p> <p>2. hyper-QUを教員全体で実施・分析する。また、生徒のその他検査等の実施も検討する。毎週末の最後の帰りSHRにて振り返りアンケートを実施する。</p> <p>3. 共成委員会の活動を明確化する。共成委員会又は有志により共成を促進させるイベントを実施する。</p> <p>4. 自分自身と今自分が所属する場所について振り返らせる取り組みを行う。</p>	<p>1. 道徳はシラバスに記載した内容を実施できたかを評価する。高校では予定通り人権LHRを実施できたか・道徳教育の観点で各科目内に浸透しているかを各学期に教員アンケートをとり、その結果で評価する。</p> <p>2. hyper-QUの年2回実施及び分析を行う計画を立案し実施できたかで評価する。振り返りアンケートの毎週末実施で評価する。</p> <p>3. 年2回以上実施できたかで評価。</p> <p>4. 3. のイベント等にて『理想の青翔開智生』『青翔開智生としてどうあるべきか』を問う企画や計画で実施できたかを評価。</p>	<p>1 : A</p> <p>2 : A</p> <p>3 : A</p> <p>4 : A</p>	<p>1. 中学道徳は全学年、時期の入れ替えはあったもののシラバスの内容を実施することができた。高校の人権学習については、1月にLHRにて高1対象で実施。高2は現代社会の授業で実施した。人権学習を福祉的視点で考える内容であった。道徳教育についての各学期の教員アンケートは実施できた。</p> <p>2. hyper-QUは2回実施し、3月に教員向けの活用研修会を実施した。振り返りアンケートもほぼ毎週生徒へ配信した。</p> <p>3. 本年度共成委員会による主なイベント 校内：Happy Book（本の中のエピソードを書いて紹介する）を10月に実施・学校挨拶アンケート実施。 他校連携：聾学校とボッチャ大会を共同開催</p> <p>4. 青開LHRとして実施。1回目は6月、2回目は12月に実施。3回目は予定していたがオンライン授業及び分散登校となったため実施できず。</p>
重点 目 標 3 に 対 応	「飛躍」 進路支援 キャリア教 育	<p>1. 自己調整型学習の具体案を作成し、実践する。</p> <p>2. 進路支援6年間のロードマップに基づいた具体的な進路支援活動の年間計画を作成する。</p> <p>3. キャリア教育充実を図る。FTAの協力を得て、保護者の職業紹介や職業観など社会人としてのさまざまな実践や価値観を紹介する講演会を行う。各教科と紐付けて、「教科学習が将来のキャリアにどのように生きるか」という内容も含む。今年度は各学年1回はどこかの教科の授業中に実施する。</p> <p>4. 中1～高2までの模擬試験（必須のもの）の目的や実施方法を明確にし、事前事後支援も含めて実施する。客観的な学力測定という位置付けとともに、自己調整型学習への手段としても有効活用する。</p>	<p>1. 英検・数検に向けた自己調整型学習シートを作成する。目標級やレベルに応じた「型」をいくつか提供し、生徒はそれに記入して「学びの過程」を記録する。結果よりも過程を重視した学びを習慣づける。</p> <p>2. 模試、検定、キャリア講演などを記載した物を生徒保護者と共有する。</p> <p>3. 学年と教科を指定して、FTAと適切な人材を協議して決める。FTA以外にも放課後等を利用してオンライン講演会などを開催予定。毎月最終金曜日開催予定。教科に係るものは1学期に1回予定する。</p> <p>4. 年間LHRの空きを確認し、模擬試験の事前事後指導を行う。</p>	<p>1. 英検・数検に向けた自己調整型学習シートを目標級やレベルに応じて提供できたか。また検定後の「自己省察」を記入させてシートを回収し、合格者と不合格者のシート活用状況を整理できたかどうかで評価する。</p> <p>2. 進路支援6年間のロードマップに基づいた年間計画表を作成し、生徒保護者と共有できたかどうか。また計画通りに実施できたかどうかで評価する。</p> <p>3. 各学年1回は保護者によるキャリア講演会を実施できたかどうかで評価する。FTA以外の講師によるオンラインキャリア講演を実施できたかどうかで評価する。</p> <p>4. 中1～高2までの模擬試験の前後に事前事後支援ができたか(LHRでの活動) どうかで評価する。</p>	<p>1 : B</p> <p>2 : A</p> <p>3 : A</p> <p>4 : A</p>	<p>1: 英検・数検用の自己調整学習シートを作成し、受検者へ配布した。各検定の各問題への具体的な勉強方法も例示することもできた。しかし、受検後の「自己省察」シートの作成と回収には至らなかった。また数検へのブッシュが英検と比較すると弱かった点が課題である。</p> <p>2: 6年間のロードマップから、各学年の具体的な進路行事がわかる一覧を作成。保護者懇談会や年度末の進路動画（中2・3）で年間行事の振り返りと次年度の予定も共有できた。この流れを今後も継続したい。</p> <p>3: 中1～高1まではFTAの協力を得て、各教科で実施することができた。各教員の知人6名にそれぞれの活躍に関するオンライン講演(LIFE2021!)を行った。</p> <p>4: 中1～中3は専用の冊子を作成し、1ヶ月前からの事前指導と、結果（個人帳票）返却後の事後指導（自己省察と次への接続）を春休課題の自己選択へと繋げることができ、流れが確立された。高校生は学年独自のシートで独自に行った。進路で統一シートを作成したい。</p>

重点目標4に対応	学校広報	<p>1. 小学校6年生の受検者数安定化をはかる。</p> <p>2. 小学校5年生以下の未就学児・児童・保護者が学校に関わる機会を増やす。</p> <p>3. 探究科と連携してSSH事業の成果を学内・学外へ発信する</p>	<p>1.</p> <p>①紙媒体を縮小・整理し、制作コストと労力を削減する。広告を縮小し取材による認知の機会を増やす。</p> <p>②web媒体（ホームページ・Facebook）活用したオンライン広報を強化する。</p> <p>③YouTube・Zoom・映像コンテンツの充実をはかる。</p> <p>2.</p> <p>①小学校5年生以下の児童および保護者を対象とした学校説明会を実施</p> <p>②小学校5年生以下の児童を対象とした学校体験型行事を実施</p> <p>③学園祭「青開世界」における学校の取り組み紹介</p> <p>3.</p> <p>①SSH事業で開発した教材や授業事例を学外へ公開する。（探究基礎および探究スキルラーニング）</p> <p>②SSHに関連した発表実績を学外へ公開する。</p> <p>③青開学会における成果発表の一部をオンラインで公開する。</p>	<p>1.</p> <p>①昨年度対比でコストダウンをはかれたか。取材機会が増加したか。</p> <p>②昨年度と同程度のホームページ新着情報・Facebookの更新ができたか（昨年度96回）。昨年度同様、適切な時期にホームページ更新ができたか。</p> <p>③YouTubeチャンネルの更新頻度・チャンネル登録者数・再生数等に改善が見られたか。その他Zoom・映像コンテンツを活用した広報を行なったか。</p> <p>2. 行事の実施状況により評価する。</p> <p>A：①②③とも実施</p> <p>B：①②③の中で2つ実施</p> <p>C：①②③の中で1つのみ実施</p> <p>3. 公開状況により評価する。</p> <p>A：探究基礎で開発したワークブック、探究スキルラーニングの事例、SSH関連の発表実績、青開学会における成果発表をすべて公開した。</p> <p>B：上記の中で公開できないものがあった。</p> <p>C：上記の中で公開できないものが2つ以上あった。</p>	<p>1：A</p> <p>2：A</p> <p>3：A</p>	<p>1.</p> <p>①広報費を削減し、かつ取材によるさまざまな媒体への露出が増加したことが認知度の向上や学校の教育内容に対する理解促進につながった。一方でメディア対応や視察の要望に関する業務の煩雑さやボリュームが課題にあがっている。</p> <p>②web媒体を活用したオンライン広報を効果的・効率的に行うことができた。学校の情報を一定の質・頻度で発信することができた。</p> <p>③YouTubeチャンネルのコンテンツを充実させ、運用方法を改善したことが再生数などの伸びにつながった。</p> <p>2.</p> <p>①②③とも実施した。③の公開範囲が狭いことや情報量の不足が今後の課題となっている。</p> <p>3.</p> <p>①②③とも実施した。探究スキルラーニングの事例については学年・教科・スキルの偏りを改善することや、更新頻度をあげることが課題となっている。</p>
----------	------	--	--	---	----------------------------------	--

重点目標5に対応	学校運営 FTA	<p>1. 学級委員会の活動を通して生徒会が考えていることをクラスに反映させる。</p> <p>2. 学年担任制度への移行を図る。</p> <p>3. キャリアパスポートの目的を、生徒の自律に置き換え日常的な運用ができるような変更を図る。</p>	<p>1. ルーブリックを作成し定期的に全校生徒に生徒会の評価を実施、その結果を生徒会にフィードバックする。</p> <p>2. 副担任の業務をBLEND配信に加え、①朝・帰SHR、生徒の個別面談、三者面談の定期的実践を定着させ、②道徳やHRに関しては全教員が他学年の道徳実践等に関わることで、生徒の多様な価値観の形成に努める。</p> <p>3. 生徒が自分の年間の予定を把握し、その予定に沿って自律的にスケジュール管理・振り返りができるような体裁・サイズに変更し、次年度からの運用を目指す。</p>	<p>1. 各学期ごとにルーブリックを用いた評価を実施できたか。 A：各学期3回は評価を実施し、年度末の生徒会目標理解度が80%を超える。 B：年間2回評価を実施し、年度末の生徒会目標理解度が60-70%台になる。 C：年間1回しか評価が実施できず、年度末の生徒会目標理解度が50%を下回る。</p> <p>2. 教員が複数のクラス・学年の活動に参加できたか。 A：①と②が実施できた。 B：①と②に関しては一部の教員が実施できた。 C：①のみしか実施できなかった。</p> <p>3. キャリアパスポートが自律を促す形態に変更できたか。 A：次年度から運用できるよう内容・体裁の変更が完了した。 B：内容のみ変更できた。 C：部分的にしか変更できなかった。</p>	<p>1：B</p> <p>2：B</p> <p>3：A</p>	<p>1. 当初、目標を「理解度」としたが、「理解」という言葉の共通理解が難しいことから「認知度」とし、公約も示した上でアンケートを実施した。しかし、行事などに組み込まれているものとしては委員会活動が多く、なかなか生徒会の活動が浸透することに困難を感じた。</p> <p>2. 朝SHRと帰SHRは各学年ともに副担任も2クラスそれぞれ週1程度代わりに行う、三者懇談もそれぞれのクラスに担任と同席することができた。一方で、道徳に関しては学年団が時間割に入っているものが多くを占めてしまう結果となり、事前打ち合わせ等の時間の確保も必要であることを実感した。</p> <p>3. 昨年度の様子からサイズを小さくすることで使用頻度が上がると想定したが、今年度の活用の仕方として、探究スキルラーニングのフィードバックシートや学推の結果などを同じファイルに閉じるようになったことから、サイズの変更はしなかった。内容に関しては、中高ともに今年度の実施状況や担任、進路への聞き取りなどから大幅にリニューアルすることができた。</p>
重点目標6に対応	教務	<p>1. 全教員が新学習指導要領の内容を十分理解するとともに、教育内容の質向上を目指す。</p> <p>2. 社会に開かれた教育課程の実践を集約、周知する。</p> <p>3. 個別最適な学びの充実に向け、新しい教育課程へスムーズに移行できる基盤づくりを行う。</p>	<p>1. 5教科（国語、社会、数学、理科、外国語）において、新学習指導要領をもとに授業研究のための教科会を設定、実施する。</p> <p>2. 家庭や地域、企業等と協力して実施した授業をとりまとめ、全教員がその内容を知る機会を設ける。</p> <p>3. 生徒個別の履修に対応できる教材管理方法の計画、実践、評価、改善を行う。</p>	<p>1. 教科会を設定、実施できたか。 A：5教科すべてにおいて授業研究のための教科会を年2回以上実施した。 B：5教科すべてにおいて授業研究のための教科会を年1回実施した。 C：5教科のうち授業研究のための教科会を実施できない教科があった。</p> <p>2. 実践例を集約、周知できたか。 A：実践例を集約するフォームを活用し、実践例のうち先進的な事例を職員会議等で共有する機会を設けた。 B：実践例を集約するフォームを活用し、教員に対して情報集約を呼びかけた。 C：実践例を集約するフォームを作成した。</p> <p>3. 教材管理方法を実践、評価できたか。 A：すべての生徒の教材を適切に管理できる方法を実践、評価できた。 B：共通して履修する科目について適切に管理できる方法を実践した。 C：適切な管理方法を実践できなかった。</p>	<p>1：B</p> <p>2：C</p> <p>3：B</p>	<p>1. 5教科すべてにおいて、定例の教科会内で新学習指導要領の内容を確認することができた。研究授業の時間を確保することが難しく、実践的な研究には至らなかった。</p> <p>2. 実践例を集約するフォームを作成したものの、活用することができなかった。</p> <p>3. スプレッドシートとフォームを用いて教材を管理する仕組みを作ることができた。一部で曖昧な部分が存在しており、改善が必要である。</p>